

「DNA 鑑定技術の運用を確かなものにした上で事件捜査に活用を」上智大生殺人放火事件

(TBS NEWS DIG Powered by JNN)

<https://news.yahoo.co.jp/articles/3460bef7a9332ee51d613384b41fac1eaec4b176>

東京・葛飾区で上智大生が殺害され自宅が放火された事件は、きょうで未解決のまま 29 年が経ち、現場で献花が行われました。

この事件は 1996 年 9 月 9 日、葛飾区柴又の住宅で、当時、上智大学の 4 年生だった小林順子さん（21）が殺害されたうえ、自宅が放火されたものです。

この事件では 1 階で見つかったマッチ箱から A 型の男の血液が、そして、2 階の遺体にかかれていた布団からはマッチ箱と同じ DNA 型の血液が検出されています。

事件から 29 年となったきょう、現場となった自宅の跡地では献花が行われました。

順子さんの父親 小林賢二さん

「DNA は究極の個人情報であることは言うまでも無く、その運用を確かなものにした上で事件捜査に活用してほしい」

父親の小林賢二さんは DNA 鑑定技術を活用した捜査について「取り扱い方法を誤らないよう配慮しながら法整備を進めてほしい」としています。

警視庁は、当時、現場付近で目撃された「不自然に大きなコート」を着た不審な人物の等身大パネルを今月新たに制作し公開した上、情報提供を呼びかけています。

岡部誠幸捜査一課長は、「事件があった月には野茂英雄さんがメジャーリーグでノーヒット・ノーランを達成した。そんなことをきっかけに思い出して情報を寄せてほしい」としています。